徳川家康の神忌と大祭
―和歌祭の変遷をとおして―

TOKUGAWA Ieyasu's Shinto memorial service and TOSHOGU festivals in various countries Focusing on the WAKAMATSURI festival

吉村 旭輝[1]
[1]和歌山大学紀伊半島価値共創基幹　紀州経済史文化史研究所

2022年，紀州東照宮の例祭である和歌祭は四百年式年大祭を迎えた。しかし，全国各地に数百とある東照宮のなかで江戸時代に渡御行列を有した大規模な祭礼は8祭礼（日光，尾張，紀伊，水戸，岡山，広島，鳥取，仙台）しかなく，現存しているものはさらに少ない。また，紀伊を除く多くの祭礼はすでに四百年を記念する大祭を2016年に終えている。ここでは，なぜ紀伊だけが2022年に四百年式年大祭を行なうのかを和歌祭の歴史を中心に確認し，近世から現代にいたる経済的基盤の変化に注目した上で，運営資金をもたない和歌祭がなぜ継承されてきたのかを明らかにした。

キーワード：東照宮祭礼，神忌，大祭，和歌祭，神仏分離令，商工祭

はじめに

2022年（令和4）紀州東照宮の例祭である和歌祭は四百年式年大祭を迎えた。こうした東照宮における大祭は，東照大権現として東照宮に祭神として祀られた徳川家康の年回忌，つまり「神忌」ごとに行なわれてきた。日光東照宮をはじめとする全国の東照宮では，すでに四百回神忌を記念する大祭を2015年（平成27）に終えている。なぜ紀州東照宮だけが2022年（令和4）に四百年式年大祭を行なうのか。ここでは，東照宮祭礼の神忌祭の歴史について日光東照宮の祭礼と和歌祭の歴史を数多存在する先行研究を中心に確認し，この問いを明らかにしたいと考えている。

また，東照宮祭礼は近世から現代にいたる過程で，その性格から経済的基盤の変化に大きく左右された祭礼だといえよう。ここでは上記の問いを経済的基盤の変化に注目しながら考察を進めたい。

1．東照宮祭礼の成立と御神忌祭

1616年（元和2）4月17日，徳川家康が死去する。その遺骸は久能山に埋葬され，1年後に日光に移されることになる。この話はすでに数多の論考が存在し，筆者も別稿ですでに論じているためここでは具体的には論じないが，多少まとめておきたい（吉村, 2017）[1]。

家康の死の前日にあたる16日，豊国社神龍院の社僧であった梵舜が吉田神道の神式をもって家康の遺骸を久能山に埋葬する命を受ける。その上で，葬儀は江戸の増上寺で行ない，位牌は三河の大樹寺に立て，その上で一周忌ののちに遺骸は関東八州の鎮守として日光山に移せとの遺命が下る。

翌17日，家康が死去，その夜遺骸を久能山に移す。供奉したのは「台徳院殿御実記」（『徳川実記』）記載の家康直参の家臣4名（本多正純，松平正綱，板倉重昌，秋元泰朝）と徳川秀忠および御三家の名代（土井利勝，成瀬正成，安藤直次，中山信吉），そして崇伝，天海，梵舜であった。

さらに翌18日には梵舜が中心となり，家康家臣と宗家・御三家家臣によって協議を行ない，久能山に仮殿を造営し，また同27日には，駿府城主徳川頼宣によって久能山の造営が進められることになった。

この段階では家康の葬儀および埋葬は，豊臣秀吉と同様に吉田神道の吉田家出身の梵舜が中心となって，葬儀と久能山への埋葬が行なわれたのである。

しかし，以後1年間は，家康の神号をめぐってさまざまな議論が重ねられ，梵舜や崇伝が主張する「大明神」ではなく，天台座主の天海が主張する「大権現」の神号が採用され，以後天海が中心となって「東照大権現」を中心とする山王一実神道の創始にいたる。この神式に基づき家康は東照大権現として，中世以来関東の天台修験の霊場であった日光山に埋葬されることになる。

翌1617年（元和3）2月15日，家康の遺骸が久能山から日光に移されることになる。その時のことを記した「台徳院殿御実記」には，

宰相頼宣卿の祭祀を受給ひ。その後日光山に御垂跡あるべしとの御あらましなりしかど。三年を待せらるべきにあらずと思召旨有て。頼宣卿へ議せられ。日光山　　神廟経営をいそがせ給ひしかば。この程はや成功せしにより。けふ　　神柩を発行せらるべきに定まる。

とあるように神柩（遺骸）を日光山に移す指示を頼宣が行なったといえる[2]。

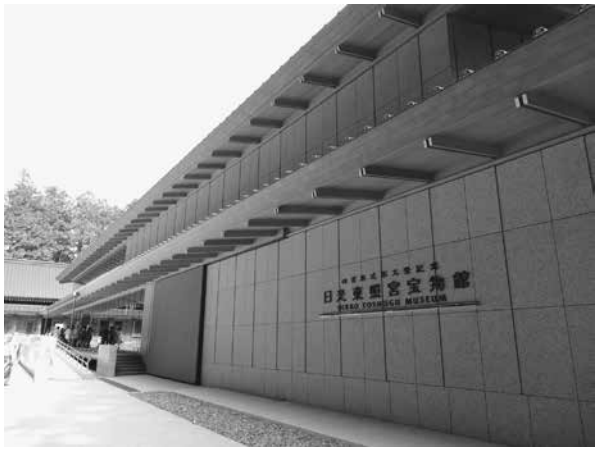
この日光山にむけて発せられた神柩は，約1ヵ月かけて日光山に到着することになる。そして神柩が日光山に到着して行なわれたのが，4月16日の小祥祭であった。この祭礼は家康一周忌の法会および御神忌祭にあたり，盛大に行われたことが「台徳院殿御実記」に記されている[3]。このように山王一実神道をもとにした東照宮祭礼が完成したと考えられ，そこには頼宣が大きく関与したことが考えられる。

しかし日光山での小祥祭の行列立ては，法会・神事を行なう日光山と徳川家臣団，そして田楽（史料によっては僧伶など）や猿牽といった芸能者の供奉による渡り物を中心として構成されており，筆者もかつてこのことについて高藤晴俊の論文の「神輿渡御の供奉の種目や御道具類は，元和三年の当初から完備されていた訳ではなく，御鎮座以後，徐々に整えられていった。」また，「家康の死後間もない祭礼であり，また史料の真偽が明らかになっていない以上，東照社祭礼がこの時完成したとはいえない。」という説を引用している（高藤，2003）[4]。このことは同時代の史料が残されていないこと，また「台徳院殿御実記」には「僧伶」，他の史料では「田楽」や「坊主楽人」などの表記揺れがあることから間違いではないと考えられる[5]。さらに日光山の祭式は東照社が1636年（寛永13）に徳川家光が寛永の大造替を行ない，神忌の祭礼も狩野探幽によって『東照社縁起』として描かせていることから，約20年かけて整備されたと考えられる[6]。1636年（寛永13）の家康十七回神忌にあたる祭礼は国立公文書館の内閣文庫所蔵「日光山御神事記」に記されており，その行列立てからこの時点である程度完成されてきたことがわかる[7]。

家光による寛永の大造替は家康，つまり東照大権現の二十一回神忌にあたる。また『東照社縁起』が家光によって東照社に奉納されたのも1640年（寛永17）4月17日で，この日は二十五回神忌にあたる[8]。このようにおおむね二十五回神忌の祭礼までに完成されたといえよう。また東照社（宮）では神忌を基準として大事業が行なわれてきた。これまでに行なわれた日光東照社（宮）での神忌の祭礼および近代の大祭は以下のとおりである。

- 1617年（元和3）…小祥祭（一周忌）
- 1622年（元和8）…七回神忌
- 1628年（寛永5）…十三回神忌
- 1632年（寛永9）…十七回神忌
- 1636年（寛永13）…二十一回神忌
- 1640年（寛永17）…二十五回御神忌祭
- 1648年（慶安元）…三十三回御神忌祭
- 1665年（寛文5）…五十回御神忌祭
- 1715年（正徳5）…百回神忌
- 1745年（延享2）…百三十回神忌
- 1765年（明和2）…百五十回神忌
- 1815年（文化12）…二百回神忌
- 1865年（慶応元）…二百五十回神忌
- 1915年（大正4）…東照宮三百年祭
- 1965年（昭和40）…東照宮三百五十年祭
- 2015年（平成27）…東照宮四百年式年大祭

これは近代に入ってからも行なわれており，1915年



【上】日光東照宮東照宮四百年式年大祭
【下】記念行事として建築された宝物館

（大正4）の三百回神忌にあたる「東照宮三百年祭」では宝物館が完成し，また2015年（平成27）には四百年式年大祭ではその記念として新たに日光東照宮宝物館が建築されている。こうした神忌での記念事業は，近世には大祭として行なわれ，諸藩が藩内に創建した東照社（宮）でも同様に大祭が行なわれた。

次に頼宣が紀伊藩で創始した東照宮祭礼である和歌祭の神忌をとおしてみていきたい。

2. 神忌と和歌祭

東照社祭礼のもっとも古い記録は紀伊藩の和歌祭といえよう。徳川頼宣は小祥祭の2年後にあたる1619年（元和5）に国替えのため紀伊藩に入国する。その2年後の1621年（元和7）に和歌の浦の地に天海を90日間招へいし，神事や法会の整備を執行させ，東照社とその別当寺にあたる和歌山（わかさん）天曜寺を初代別当として創建する[9]。そこで翌1622年（元和8）に完成したのが和歌祭であった。和歌祭は創始された時の記録が残る唯一の東照社祭礼である。その記録は天曜寺の名をあらためた雲蓋院所蔵の「和歌東照宮御祭礼之次第」（1778年（安永7）写）に記されている[10]。この記録は写ではあるが，東照社祭礼の史料としてはもっとも古いと考えられる。その内容は個別の行列立てが記され，祭礼の全貌を把握することができる。その行列立ては大きくわけて「先の渡り物」「練り物」「後の渡り物」で構成されている。渡り物は日光山の小祥祭の記録と類似しているため，どちらかが元になったことが考えられる。とくに和歌山城下町民が出した練り物は他の東照宮祭礼の先例ともいえる事例で，城下町民が参加する東照宮祭礼としてはもっとも古いといえよう。また，この和歌祭行列立てからは家康の「御意」のもと行なわれた1604年（慶長9）に京都・豊国社で行なわれた豊臣秀吉七回忌の臨時祭礼に出勤した田楽法師の出勤，さらに京都の祭礼で多数出される剣鉾が出され，そして町衆の参加といった共通点が見られる。このことは頼宣が生前の家康の意向を体現し，さらに京都で行なわれていた祭礼の要素を取り入れたと考えられる[11]。

和歌祭は1665年（寛文5）に縮小令が出され，大幅に縮小されることになるが，それまでの和歌祭は次のような流れで行なわれていた。

- 4月1日…「榊竹」立て（東照宮社頭鳥居脇）
  八つ時（午前2時）…天台声明（雲蓋院）
  （16日まで）
  荷出し（雑賀踊等の道具を祭礼蔵から出し，練り物担当町へ渡す。加茂村が人足として担当）
  ※これは現在でも毎年5月1日に「鉦おろし」という行事が残っており，同日午前8時に摺鉦・太鼓が鳴らされ，それをきっかけに祭礼道具の「荷出し」が行なわれている。
- 4月6日…「ならし」（練習）（鷺森御坊で雑賀踊）
- 4月12日…神輿の荘厳および神体の奉移
  （神輿は護摩堂に安置）
- 4月16日まで…「和歌芝居」（大相院（現雲蓋院の場所）の竹本丹後別荘から玉津島社にかけて狂言と浄瑠璃の小屋掛け。小屋の設営や興行は「宮下」である和歌村の担当。）
  ※慶安3年（1650）から寛文5年（1665）。
- 4月17日深夜…本殿神事
  ①天台声明（拝殿前）（深夜）
  ②神体の奉移・威儀物を出す
  ③田楽奉納
  ④天台声明
  五つ時（午前8時）…「神輿おろし」
  ①奉幣神事（藩主（代参））
  ②田楽奉納（刀玉・高足）
  ③舞楽奉納
  四つ時～四つ半時（午前10～11時）
  ④神輿おろし（和歌村）
  ※神輿は御橋に仮置
  …渡御～御旅所
  御旅所祭
  ①天台声明
  ②田楽奉納（刀玉・高足）
  ③舞楽奉納
  ④相撲奉納
  ⑤練り物奉納
  …終了後は還御

江戸時代の和歌祭はこうした形態で行なわれていた。この一連の流れは米田頼司が雲蓋院文書の「寛文元年日記」などさまざまな史料から当時の流れを割り出しているのでそれにしたがった（米田，2010）[12]。

こうして行なわれるようになった毎年の和歌祭は江戸時代を通じて風雨による延期（1689年（元禄2），1822年（文政5），1825年（文政8））や藩主および正室の死去にともなう延期や中止（徳川綱教正室鶴姫死

去にともなう中止（1704年（宝永元）），徳川斉彊の死去にともなう延期（1849年（嘉永2））），そして幕末の中止（1868年（慶応4））以外は決められた期日に行なわれていたことが考えられる[13]。

また和歌祭は延期や中止がないものの藩主不在で行なわれたものも多々あると考えられる。日光で行なわれた神忌にともなう祭礼がそれにあたる。先に述べた1636年（寛永13）の二十一回神忌，1640年（寛永17）の二十五回神忌，1642年（寛永19）の二十七回神忌，そして1648年（慶安元）の三十三回神忌のすべてに頼宣が社参していることがわかる[14]。これらの神忌は先にも述べたとおり，大造替，『東照社縁起』の制作，そして宮号宣下（1645年（正保2））と家光がもっともその政策に力を入れていた時期でもあり，頼宣自身もむろん日光社参をしている。

これらの年の和歌祭がどのように行なわれたかは史料に乏しく，不明な点が多い。藩主であった頼宣は代参で別のものが出席し，おそらくは日光と同日に行なわれたと考えられる。また参勤交代もあり，和歌祭が藩主不在で代参のもと行なわれたことも多々あると考えられる。

この和歌祭がもっとも華やかであったと考えられる時期は1665年（寛文5）の和歌祭を最後に，終焉を迎える。同年の和歌祭は家康五十回神忌ということもあって，頼宣自身も金子や銀子，そして太刀を東照宮に献上するなど盛大に開催された。

同年の祭礼での頼宣の動向は紀州藩家老三浦家文書の「御用番留帳」に記されている[15]。

（寛文五年四月）

同十七日　終日曇，七前より雨

今朝四前ニ殿様和歌へ御着御装束御束帯ニ而四時分ニ御参宮被為成，御拝被遊神酒御頂戴被遊候，左京様ニも同御参宮被遊候，宰相様御代参小出権大夫布衣ニ而相勤申候，帯刀若狭守拙者束帯ニて御供仕候，ろうかい之御役帯刀相勤申候，若狭守ハ御橋迄御供仕候

一当年ハ五十御年忌ニ付，御宮へ代金三拾五両安綱之御太刀御献上被遊候，宰相様より銀子三枚，左京様　同弐枚御献上被成候，去ル虎ノ年右御年忌之御法事御取越，御丁寧ニ御執行被遊候へ共，当年も右之御様子也

この祭礼の渡御行列も盛大に行なわれ，海善寺蔵の「和歌御祭礼図屏風」に描かれている。しかし，その4ヵ月後には一転，頼宣によって縮小令が出される。この縮小令も「御用番留帳」に記されている[16]。

（寛文五年九月）

同十一日

《中略》

一当四月五十年忌之御神事思召儘ニ御勤被成候ニ付，来年ゟハ軽ク可被遊との義ニ而，御祭礼之時当町中ゟ出し候ねり物古より御国ニ之有，さいかおとり一色と具足着面かぶり，此三色計出し候，残ルねり物ハ無用と被仰出候

一右之通ニ候故，和歌芝居も来年ゟ止申候ニ付，和歌村之加子米御赦免被成候旨被仰出候

このように「来年ゟハ軽ク」ということで，練り物も雑賀踊，具足着，面被以外は無用という通達であった。さらに和歌芝居も翌年からはなくすようにとのことであった。この縮小令を受けて，多くの練り物は一旦は消滅してしまったと考えられる。こうした流れは全国的にもみられる。曽根原理は比叡山延暦寺での家康の年忌行事をとりあげ，叡山文庫の止観院文書の「東照宮大権現百五十回御神忌始終之記」から読誦役の僧侶の増減に注目した論考を行なっている（曽根原，2008）[17]。そのなかでは五十回神忌では延暦寺一山の僧侶が残らず召出だされていることに対し，正徳5年（1715）の百回神忌では，人数が減らされたことを明らかにしている。ここからは家康の年忌法要が縮小されたことを示している。

また，このことは日光に神忌ごとに畿内から出勤していた田楽法師の記録からも明らかで，筆者も1813年（文化10）に，田楽法師・藤田右近が記した「東照宮様弐百回御忌御祭礼日記」を用いて指摘している（吉村，2009）[18]。田楽法師は毎回神忌の際に前回出勤の伺書を雛形として作成した出勤伺書を坂本の滋賀院門跡に提出することになっていた。この伺書の先例として用いられるのが五十回神忌以降のもので，五十回神忌を雛形として，以降はほぼ同一の文書が用いられていたことが同文書から把握できる。このことから，五十回神忌以前の幕府からの出勤依頼が，田楽法師自ら出勤を願い出る形態に，以降は変化していたことが考えられる。このように，紀伊藩だけでなく，全国的に五十回神忌を最後に変更／縮小する流れがあったことがうかがえる。このことは倉地克直の幕府側の「公儀の神」として権威を顕示するための東照宮祭礼の役割が薄くなったことが，幕府の安定により現れた結果だと指摘する表出であるといえよう（倉地，1996）[19]。

しかし，すでに東照宮祭礼は50年間継続されており，

幕府側の意図とは別に各地の民衆には「文化」としてすでに根付いていたことも考えられる。そのことは名高村（現・海南市）の浄土宗専念寺14世全長が和歌の浦の名所旧跡の由来を記した1739年（元文4）ごろの作成とされる「和歌浦物語」坤に記された当時の和歌祭の行列立てから把握できる[20]。当時の和歌祭は縮小令以降であり，当然「無用」とされ縮小されていたと考えられる母衣や唐船といった練り物も記されている。ここからは実際には縮小されなかったものがある，あるいは早々に再興されたことがわかる。この再興からは和歌山城下町民に50年間行なわれたことによる和歌祭に対する「文化」の定着をみることができるのではないか。

このことは曽根原が鳥取や鹿児島の東照宮を事例として百回神忌から百五十回神忌での50年間で社会の変化と連動していたことを指摘していることとも関連する。曽根原は上記の地方東照宮で地方寺院の僧侶が東照宮祭礼に多く参列するようになり，年忌法要を行なう姿を指摘し，また民衆が祀った東照宮も存在するようになっていったことを述べている。このことについて曽根原は権力による「慈悲の主張が公共の装いをこらして受容された様子を確認できる」と述べている（曽根原，2011）[21]。曽根原の指摘は和歌祭でも同様の指摘をすることができるのではないか。つまり，すでに和歌山城下町民に和歌祭が定着し，「公共の装い」として練り物が再興されていったと考えることもできるのではないか。その証が『和歌浦物語』の行列立てだといえるのかもしれない。このことはより具体的に後稿を期してみたい。以降は徐々に練り物も再興されていく。1800年（寛政12）には，『紀伊国名所図会』の編述者である高市志友によって餅つき踊りが再興されている[22]。

3. 神仏分離令と東照宮

和歌山城下町民に定着していた江戸時代の和歌祭は，廃藩置県によって藩が消滅した1871年（明治4）を最後に終焉する。1868年（明治元）に出された神仏分離令による廃仏毀釈が激しくなり，雲蓋院は廃寺となり，東照宮内の薬師堂，多宝塔，護摩堂，鐘楼なども破却，そして和歌祭の山王権現，摩多羅神の神輿もそれぞれ売却されてしまったことが原因である。

しかし，1873年（明治6）に東照宮が県社として存続することとなり，すぐに和歌祭も再開される。この再興には徳川家による祭典費用の奉献もあったが，なによりも「和歌浦出島浦の人民」による醵出があった。これ以降和歌祭は和歌山城下町民ではなく，和歌村（現和歌浦）の人びとによって継承されることになる。この経緯は1880年（明治13）の「東照宮　積立講仕法帳」をもとに米田が論じているためその詳細はそちらを参照されたい（米田，2010）[23]。和歌祭の再興は，和歌村はもとより，元紀伊藩家老家の三浦権五郎などの旧藩士たちが1885年（明治18）に結成した徳盛社や，市内の実業家たちの多額の寄付金に依拠している。

明治20年代にはこれらの寄付金によって和歌祭は盛大に開催されるようになっていった。また1899年（明治32）には宇田川文海による『南海鉄道案内』に「天下三大祭の一つ」と掲載されたことにより，各地から多数の観衆が訪れるようになっていった[24]。

そして明治後期には日清・日露戦争の「時節柄」にあわせ，「古式」を謳い，1899年（明治32）に陸軍大佐瀧本美輝を会長とした和歌浦東照宮明光会が結成される。戦時体制にあわせた練り物の解釈など，「戦勝と尚武の祭典」のシンボルとして1901年（明治34）に関船が復興されたこともあった。こうした祭礼資金の確保により，なんとか和歌祭を継承していた。しかし，明光会は思うように寄付を募ることができず，多額の負債を抱えて1906年（明治39）に解散している。

1907年（明治40）以降は和歌浦東照宮保存会が祭礼開催の主体となる。この保存会が以降祭礼開催の主体となるが，当初は明光会解散による負債をひきつぎ，毎年の開催するための資金を集めることすら困難な状況もあった。しかし，保存会員の寄付金で渡御を行なう目途をつけることができるようになって大正時代をむかえている。

この明治の和歌祭は，藩の消滅による和歌山城下町民から和歌村への担い手の変化からはじまり，資金難の連続であった。しかし，祭礼自体はなんとか継承されていた。そこには江戸時代から醸成されていた「地元」での和歌祭への愛着はもとより，景勝地「和歌の浦」の和歌公園の形成による同地での風光明媚な新たな「観光イベント」としての価値が付された姿の和歌祭があった。とくに『南海鉄道案内』のように鉄道会社としては格好の乗客誘致のための大祭礼であり，鉄道会社によって県外から多数の誘客を生んでいくこととなった。

4. 和歌祭藩祖入国三百年祭

大正最初の祭礼になるはずであった1913年（大正2）と翌年の和歌祭は相次いで中止された。その背景には前年の暴風雨による堤防決壊による資金不足や徳川家の喪中（1913年（大正2）），また皇太后逝去による自粛（1914年（大正3））があった。そんななか迎

えたのが翌年の1915年（大正4）の家康三百回神忌の祭礼であった。全国的には大祭が盛大に行なわれたが，上記の事情も踏まえ和歌山では1915年（大正4）の祭礼は宵宮祭だけが開催され，大祭を1918年（大正7）に挙行することとした。1915年（大正4）の宵宮祭は当時市電を走らせていた和歌山水力電力会社の協力のもと，盛大に行われ，仮装行列や土産品展示会，そして1901年（明治34）以来14年ぶりとなる関船が復興された。

この三百回神忌の延期はすでに徳川の時代ではなく，和歌祭も祭式の中身よりも今後展開されていく「観光イベント」としての姿を表象することとなったのであった。

しかし，1918年（大正7）に大祭が行なわれることはなかった。1916年（大正5）は雨で順延開催，1917年（大正6）には保存会が解散したため，この年と翌年に予定されていた和歌祭と大祭は中止されたのであった。1917年（大正6）の和歌浦東照宮保存会解散の影響は大きく，以降和歌祭が2年間開催されることはなかったのである。

しかし，紀伊藩旧家老三浦家の子孫である男爵・三浦英太郎の寄付によって状況は好転する。三浦の寄付は古くなった東照宮の社殿修復や祭礼道具の大規模な修理新調に利用され，また祭礼開催の費用などもそこから賄われることになった。その援助によって開催にこぎつけたのが1920年（大正9）の和歌祭である。この祭礼は「藩祖入国三百年祭」と銘打ってようやく大祭が盛大に開催された。この祭礼では全国から多くの観客を集めたとされる。その盛況ぶりは『紀伊毎日新聞』の同年4月19日号に以下のように記されている[25]。

> 和歌祭と往来の人員
>
> 十七日の和歌祭り参観のため汽車汽船にて同所に赴きたりものをる多数なりしが当日和歌浦港頗初め市駅和歌山駅の乗降客の状態を示せば左の如し
>
> ▲和歌浦港　乗客三千八百七十二人
> 　　降客三千三百五十三人
> ▲和歌山駅　乗客二千三十一人
> 　　降客二千六百五十八人
> ▲市駅　乗客八千三百三十二人
> 　　降客一万九千七十六人

この多数の観客は「天下三大祭の一つ」として触れた南海電鉄の宣伝も大きかったとみられる。和歌祭はこの成功をうけて，2年に1回の開催が決定した。しかし，保存会は解散したままで，和歌祭の運営基盤や体制が再構築されることはなかった。そのため，2年後の1922年（大正11）は予定どおり開催されたが，その次の和歌祭の開催は4年後の1926年（大正15）の開催となった。この時も観客が数多訪れたが，祭礼を開催する基盤の再構築ができず，ますます継続開催が困難になっていき，昭和に入ってから開催された戦前の和歌祭は1928年（昭和3）と1935，37年（昭和10，12）の3回のみで，34年と36年には大ならしのみが行なわれた。

このように和歌祭を主催する側は運営資金の調達の苦労が続く一方，開催すれば観客が多数来訪する状態が続いた。そして太平洋戦争による長い中断を迎えることとなる。

5. 和歌祭の「パレード化」

1948年（昭和23），戦争による長い中断を経て，和歌祭が復興する。この復興は敗戦後の復興事業のひとつであった和歌山港の開港記念に行なわれたミナト祭の花形としての復興であった。このミナト祭では，渡御行列が初めて和歌山城まで練り歩いた。また翌年より，和歌山市の商工祭の花形となり，以降商工祭は1984年（昭和59）まで続くが，これら戦後の和歌祭は米田が「東照宮祭礼の渡御行列としてではなく，市内中心部で行なわれるミナト祭のイベントとしてであり，本来の姿での復活ではなかった。」と述べているとおり，和歌祭から御旅所に渡御／還御を行なう「祭礼」ではなく，パレードの出し物に変容したものであった（米田，2010）[26]。この「パレード化」により，御旅所の概念が失われ，「秩序だったスケジュール」が求められた結果，これまでの渡御での観客からの芸能の「所望」がなくなり，多くの技芸も変容や失われていく結果を生んだ。最終的には腰元といった行列も誕生し，「大名行列化」ともいえる変貌を遂げている（図1）。ま

図1　商工祭で加わった腰元

た市の予算の問題から昭和40年代に入ると毎年の開催が困難となる。三百五十回神忌の大祭年にあたる1965年（昭和40）の和歌祭も「東照宮三五〇年記念」と銘打ち，商工祭として盛大に開催されたが，以降は3回のみの開催であった。そしてついに商工祭の終焉とともに昭和の和歌祭も1984年（昭和59）に幕を閉じることとなった。

この「パレード化」の波はほかの東照宮祭礼でも同様の事例がある。それが名古屋東照宮の名古屋祭である。この祭礼は尾張徳川家の東照宮祭礼であったが，戦前に終わりを迎え，戦後の1955年（昭和30）にはじまった名古屋商工まつり（名古屋まつり）にかつて名古屋祭で出されていた山車が山車揃を行なうようになっている。

安定した経済的基盤をもたない明治以降の和歌祭は，1915年（大正4）の三百回神忌を行えなかったことはやむを得えないといえよう。しかし，1920年（大正9）には藩祖入国三百年祭にきりかえたことから，すでに家康の神忌祭という役割はなくなっていたと考えられる。その後のパレード化により，さらに祭礼としてではなくイベントとしての様相が増す結果を生んでいったと考えられる。

こうした東照宮祭礼の「パレード化」は独自の運営資金をもたないが故に出資団体の意向に大きく左右される東照宮祭礼の特色ともいえる姿であるといえよう。

【上】和歌祭で復興された御船歌
【下】和歌祭で復興された唐人

おわりに

和歌祭をはじめ，全国の東照宮祭礼の多くは，江戸時代は幕府や藩などが主体となり盛大に開催されていた。しかし，明治以降は慢性的に不安定な資金繰りに苛まれ，幾度となく中断が繰り返されてきた。また，戦後も行政団体が母体となったため，「パレード化」が進展してしまった。これまで祭礼で芸能を行なう参加者が主体となることは一貫してなかったといえよう。そのため，芸能自体も幾度とない変容を余儀なくされたといえる。

しかし和歌祭は1985年（昭和60）に和歌祭保存会を結成し，「和歌祭は和歌の浦で」を合言葉に1990年（平成2）に和歌の浦で復興する。また同時に青年部（現和歌祭実行委員会）を結成し，御旅所を設営し，「渡御／還御」の復興，そして商工祭で失われた芸能の復興が行なわれている。とくに2010年（平成22）には御船歌，2012年（平成24）には餅搗踊囃子方，2017年（平成29）には唐人が復興し，学生等の新たな参加者を生んでいる[27]。

2022年（令和4），和歌祭は「和歌祭四百年式年大祭」を迎える。この大祭は和歌山城周辺で行なわれることになっている。多くの東照宮祭礼の四百回神忌祭から7年経ってから大祭が行なわれる理由は，大正の藩祖入国三百年祭によるその意義の変化と，さらに戦後のにぎわっていた商工祭へのあこがれがある。そこにはすでに家康の神忌に対する神式はもうない。

しかし，少子・高齢化が進展し，商工祭の終焉から30年以上がたった今，和歌祭は「和歌山城下の祭礼」ではなく，「和歌浦の祭礼」という認識が広がっており，継承者を和歌山市全体に再拡大する意義が今回は多分に含まれている。コロナ禍が収束しても少子・高齢化は進展し続ける。四百年式年大祭は「商工祭の再現」ではなく，和歌浦で行なう和歌祭の新たな基盤となることを願うばかりである。

注

[1] 吉村旭輝（2017）「徳川頼宣と天海による東照社（宮）祭礼の創始―東照社小祥祭と和歌祭を中心として―」名勝和歌の浦 玉津島保存会編『文化財担当者と学ぶ名勝和歌の浦』名勝和歌の浦 玉津島保存会。

[2]「台徳院殿御実記」（黒板勝美・国史大系編修會編（1964）『新訂増補 国史大系』39 徳川實記第二編，吉川弘文館）。

[3] 註2参照。
[4] 高藤晴俊（2003）「日光東照宮の神輿渡御行列について―その成立過程の考察を中心として―」『儀礼文化』32，儀礼文化学会。
[5] 1863年（文久3）『日光山祭典沿革攷』巻之一には「田楽八人」，註［2］の史料には「僧伶八人」，また，「東照宮御事蹟」799（『朝野舊聞裒藁』19，史籍研究會，1984年所収）の1617年（元和3）四月条には，「坊主樂人」という史料による違いがみられる。
[6] 徳川家光の東照大権現関連の諸政策は朝尾直弘（1991）「東アジアにおける幕藩体制」（同編『日本の近世―世界史のなかの近世―』中央公論社），高木昭作（1989）「寛永期における将軍と天皇」（歴史学研究会編『民衆文化と天皇』青木書店），そして野村玄（2005）「徳川家光の国家構想と日光東照宮」（『日本史研究』510，日本史研究会）などに詳しい。
[7]「日光山御神事記」1636年（寛永13）（神道大系編纂会編（2004）『続神道大系』神社編 東照宮，神道大系編纂会所収。）
[8]「東照大権現二十五回御年忌記」（神道大系編纂会編（2004）『続神道大系』神社編 東照宮，神道大系編纂会所収。）
[9] 和歌山市教育委員会編（1978）『和歌山市文化財総合調査報告』1，和歌山市教育委員会参照。
[10] 和歌山県立博物館編（2006）（『和歌祭―祭りを支えた人々，祭に込めた思い―』和歌山県立博物館。）および米田頼司（2010）（『和歌祭―風流の祭典の社会誌―』帯伊書店。），さらに山路興造（2013）（「東照宮の成立―和歌山東照宮祭を中心に―」『民俗芸能研究』54，民俗芸能学会所収。）
[11] 註［1］参照。
[12] 米田（2010）『和歌祭―風流の祭典の社会誌―』帯伊書店。
[13] 註［12］参照。
[14] 註［7］，［8］のほか，同書に所収されている「東照大権現廿七廻忌記」，「東照宮三十三回御忌記」に頼宣が社参していることが記されている。
[15] 上村雅洋（2003）「〈史料翻刻〉紀州藩家老三浦家文書（八）―江戸出府日記・御用番留帳―」『紀州経済史文化史研究所紀要』23，和歌山大学紀州経済史文化史研究所所収。
[16] 上村（2004）「〈史料翻刻〉紀州藩家老三浦家文書（九）―江戸出府日記・御用番留帳―」『紀州経済史文化史研究所紀要』24，和歌山大学紀州経済史文化史研究所所収。
[17] 曽根原理（2008）「徳川家康年忌行事と延暦寺」『佛教史学研究』51-1，佛教史学会
[18] 吉村（2009）「日光東照宮御神忌祭と田楽法師―変容する祭礼と芸能者の交渉史―」日次記事研究会編『年中行事論叢－『日次記事』からの出発－』，岩田書院。
[19] 倉地克直（1996）『近世の民衆と支配思想』柏書房。
[20] 全長『和歌浦物語』，1739年（元文4）頃（柏原卓編（1996）『和歌浦物語』和泉選書所収。）
[21] 曽根原（2011）「徳川家康の年忌儀礼と近世社会―二つの百回忌行事からの考察―」日本思想史懇話会編『日本思想史』78，ぺりかん社。
[22] 高市志友編述『紀伊国名所図会』初編，1812年（文化9）（同編述（1996）『紀伊名所図会』臨川書店所収。）
[23] 註［12］参照。
[24] 宇田川文海編述（1899）『南海鉄道案内』下，南海鉄道株式会社
[25] 米田編（2010）『和歌祭関係資料―明治～戦前昭和期新聞記事―』私家版所収。
[26] 註［12］参照。
[27] 御船歌，唐人復興の経緯については吉村（2011）「和歌祭御船歌を歌い継ぐ人びと」和歌山大学紀州経済史文化史研究所編『和歌の浦―その原像を求めて（紀州研フィールドミュージアム叢書③）』清文堂出版および吉村（2020）「大学博物館による地域研究と祭礼の担い手の変化―和歌祭御船歌と唐人の「復興」・「継承」をとおした実践活動と学生教育―」『近畿民具』41，近畿民具学会，餅つき踊り囃子方の復興については蘇理剛志（2014）「和歌祭餅搗踊囃子方の復興について」『和歌山地方史研究』66，和歌山地方史研究会をそれぞれ参照されたい。